高知県・四万十・足摺エリア

「何にもないのに、なんでもある」
田舎だからこその体験

四国の西南部に位置する高知県の四万十・足摺（幡多）地域は、日本最後の清流と言われている「四万十川」を中心に「足摺岬」など山、川、海と多様な自然環境に恵まれた地域です。

この豊かな自然環境を生かしたさまざまな体験プログラムを商品化しており、全国に誇れる体験型観光の先進地を目指して取り組みを進めております。

体験プログラム

体験プログラムは、「何にもないのに、なんでもある」をキーワードに豊かな自然が残っている田舎だからこそできる体験を中心に、食、文化、漁業、農林業など70種類を超える体験プログラムを提供しております。

田舎暮らし体験

特に大都市圏の学校から高い評価を得ているのは、一般の農山漁村家庭の〝ありのままの暮らし〟を体験できる「田舎暮らし体験」です。現在、受け入れ家庭数は80軒を超え、1日最大300人程度の受け入れが可能となっています。山、川、海に恵まれたこの地域ではもあり、一番人気です。漁師のおじさん、おばさんがインストラクターとなり、生徒自らがカツオ1本を丸ごとさばいてわらで焼き、タタキを作って食べます。この体験によりカツオ漁の歴史や高知の食文化などを感じ、食材への感謝の気持ちを育むとともに、魚嫌いの生徒も自然と食べることができるようになります。

四万十川でのカヌー体験

人気が高い「カツオのわら焼きタタキづくり体験」

生活体験では受け入れ家族と交流

80軒を超える受け入れ家庭がある

四万十川カヌー体験

初心者でも安全かつ気軽に体験できます。カヌーから見る自然景観は、日本の原風景とも言えます。最後の清流、四万十川を見ることのできる貴重な体験となります。

防災学習

地震などの自然災害から身を守り、生きる力を育てるプログラムを用意しています。過去に起こった事例を学ぶのではなく、これから起こり得る近い将来の災害について自分たちがどのような行動ができるのかを考え、一人一人の防災意識を高めるためのプログラムとなっております。体験場所の黒潮町では、防災先進地としての取り組みが評価され、平成28年度には「『世界津波の日』高校生サミット」が世界で初めて開かれました。

受け入れ態勢

受け入れ窓口の幡多広域観光協議会は、高知県と幡多6市町村（四万十市、宿毛市、土佐清水市、黒潮町、大月町、三原村）で組織し、官民が一体となって体験プログラムの造成、受け入れ団体の質の向上、誘致活動の実施、広報PRに取り組んでおります。

受け入れでは、関係団体や地域が一体となったネットワークを築き、安全で信頼性の高い体験プログラムを提供できるよう取り組んでいます。

四万十・足摺地域でしか体感できない豊かな自然、食、伝統文化、生活や人と人との心のつながりを生徒に感じていただけるよう心掛けて進めており、教育関係者から高い評価を得ております。

カツオのわら焼きタタキづくり体験

高知の食文化の代表で

一般社団法人 幡多広域観光協議会
〒787-0014 高知県四万十市駅前町15-16
TEL 0880-31-0233 FAX 0880-31-0660
E-mail:syuryo@hata-koiki.com
URL http://www.hata-kochi.jp/

長崎県・五島市

「一島一校」の受け入れ
国境の離島から日本を考える

長崎県五島列島・福江島を中心に、11の有人島と52の無人島からなる五島市。美しい海と豊かな自然があふれ、四季を通じて釣りや山海の味覚が楽しめます。

古くは遣唐使の寄港地として海外交易の拠点として栄え、またカトリック信仰の地として数多くの教会が点在。さらに倭寇や空海の伝説が残り、城郭や武家屋敷など歴史文化遺産も豊富です。

2018年7月には五島市の二つの構成資産を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産として登録されました。

400人受け入れが可能な民泊

五島市では現在、豊かな自然と多様な農林漁業の営み、歴史や文化を生かした体験交流型教育旅行の受け入れを推進しています。「五島感動しまし旅！」と銘打った一連のプログラム群でこだわっているのは、「ほんもの体験」であることです。

ほんもの体験の根幹は、島の暮らしをどっぷりと体験する民泊です。市内全域で最大1200軒400人の受け入れが可能で、生徒の皆さんをお客さまではなく家族の一員として迎え入れます。

体験は、民泊先などで受け入れ家族と一緒に過ごす家業体験、島ならではの漁業体験、豊かな自然を存分に楽しむ自然体験など多様なプログラムがございます。

日本の縮図としての五島

五島感動しまし旅！では、五島ならではの魅力を実感してもらうとともに、五島が抱える課題についても考える、教育効果を意識した体験プログラムを設計、展開しています。

五島の魅力としては、①「しま」ならではの自然②豊かな海と漁業・魚食文化③教会と世界遺産・日本遺産―があります。

離島ならではの自然体験や漁業体験（防波堤釣り、船釣り、定置網、刺し網、地引網、すけ漁、灰ダコ捕り、ウニ割りなど）、魚さばき体験などを実施しています。

五島の課題としては、①「日本の縮図」としての五島（過疎高齢化）②「国境離島」としての五島（担い手不足）③「観光小国」としての五島（観光産業全般の低迷）―の三つが挙げられます。

五島市では高齢化が進み、高齢化率は40％に迫る勢いです。民泊受け入れ家庭の多くは高齢者世帯です。交流を深める中、ありのままの五島と、その先にある日本の課題について考えるよい機会になります。

プラス半日を民泊先で一緒に過ごす「ふれあい交流体験」（家業体験）も推奨しています。島民との交流に力点を置いたもので、移動の手間が省け、昼食もセットにできるため、人気となっています。

高校モデルコース

長崎平和学習と五島民泊が定番のコースです。民泊1泊の場合は、ふれあい交流（家業）体験を組み合わせることで深い交流を目指します。民泊2泊の場合は、中日の午前か午後にクラス全体でできる漁業体験などを組み込むことで、生徒同士の交流も深められます。

五島市の強みと特徴

民泊と海を主舞台にした体験、さらに地区ごとに他校受け入れのない「一島一校」の受け入れポリシー、そしてカラーテープの舞う島ならではのお別れの光景など、五島ならではオンリー1のおもてなしが強みです。

民泊は最大１２０軒の受け入れが可能

ふれあい交流体験

世界遺産登録された旧五輪協会堂

港でのお別れの光景

一般社団法人 五島市観光協会
〒853-0017 長崎県五島市武家屋敷2-1-20
TEL 0959-76-3303 FAX 0959-72-2105
URL http://www.goto-shimatabi.com/

「主体的・対話的で深い学び」へ

長崎・五島で
全国ほんもの体験フォーラム
人が高まる旅 推進

体験型観光に積極的に取り組み、成果を上げている地域の事例や課題を議論する第15回「全国ほんもの体験フォーラムin長崎・五島」が3月21～23日の3日間、長崎県五島列島・福江島の「福江文化会館」をメイン会場に開かれた。離島での開催は今回が初となる。

主催は、全国ほんもの体験フォーラムin長崎・五島実行委員会。共催は全国ほんもの体験ネットワーク。21日の全体フォーラムには県内外から、受け入れ家庭やインストラクター、旅行会社ら約700人が参加。期間中は、全体フォーラムに加え、22日に課題別研究分科会を、22、23日に体験ツアーを催した。

全体フォーラムは、事例発表と公開パネルディスカッション、情報交換会を開催。公開パネルディスカッションのテーマは、「感動！人が高まる旅」。全国ほんもの体験ネットワーク会長の藤澤安良氏（体験教育企画社長）がコーディネーターを務め、体験型の教育旅行による教育効果などを検証した。

ふるさと体験学習協会（岩手県久慈市）会長の下舘満吉氏は「かつての物見遊山的な修学旅行の記憶は残っていかないが、体験型は忘れない。体験型の修学旅行を経験した不登校の生徒が、学校に来るようになった」などと報告。沖縄体験ライカナイ（沖縄県）代表の加藤明宏氏からも、「ある不登校の生徒から、不登校をやめる、と教師に電話があった」とした一方で、「受け入れ家庭も刺激をもらっている」と地域活性化にもつながっているといった発言もあった。

21日の第1分科会のテーマは「農村漁村生活体験民泊（農泊・渚泊）の推進」。安全対策の徹底や、受け入れ家庭の拡大などについて議論した。

全体フォーラムのパネルディスカッションにも登壇したふるさと体験学習協会の下舘氏からは「衛生面では毎年、保健所を招き研修会を行っている。防災面では避難場所と連絡先を冊子にまとめている」といった報告があった。

各地域共通の話題として、高齢化による受け入れ家庭の減少がある。まつうら党交流公社（長崎県）副理事長の山下與範氏は、「何もしないと（受け入れ家庭は）自然に減ってしまうので、Iターン、Uターンで帰ってきた若い家庭にも受け入れをお願いしている」と報告。そらの郷（徳島県）課長の松浦英人氏は、「移住者の民泊家庭が10軒ある。Uターンも少しずつ増えている」などと述べた。

フォーラムが開催された五島市は昨年、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録され、話題を集めた。体験型の教育旅行は民泊、漁業、世界遺産・日本遺産といった各種プログラムを取りそろえている。2018年度の体験型修学旅行の受け入れ実績は25団体、約4500人だった。

フォーラムの受け入れに当たった五島市観光協会の大楠末次氏は、「初めての離島開催で準備不足の点もあったかと思うが、五島の良さを少しでも体感してもらえたのではないか。貴重な意見交換もでき、この経験をこれからの活動に生かし、五島ならではの体験を通して少しでも感動を感じてもらえるよう鋭意努力していく」と話した。

パネルディスカッション

体験型観光に取り組む
全国の700人が一堂に

▶全体フォーラム後の交流会

▶次回フォーラムの開催地に決まった長野県飯田市の関係者が登壇した

次回フォーラム開催は
来年３月に長野・飯田で
ネットワーク総会で決定

体験型観光の振興に取り組んでいる全国組織「全国ほんもの体験ネットワーク」（藤澤安良会長）の第24回総会が3月21日、長崎県五島市で開かれた。全国から約70人が参加した。

今年10月に予定されている消費税10％に伴う対応や、訪日外国人教育旅行への対応について意見が交わされたほか、2019年度の第16回「全国ほんもの体験フォーラム」が長野県飯田市を中心に開催されることが承認された。

飯田市は、第1回のフォーラム開催地で今回が2回目の開催となる。日程は来年3月21～23日の3日間。21日が全体フォーラム、22日が課題別研究分科会、22と23の両日に体験ツアーを予定。メイン会場は飯田文化会館となる。

受け入れを担う南信州観光公社（長野県飯田市）は、地域連携DMOとして、観光を通じた地域振興を目的に「SDGs（持続可能な開発目標）南信州ツーリズム」の推進を掲げている。「ほんもの体験を推進する各地域の挑戦は、必ずや人をより良く変え、地域を変え、日本を変えていく原動力になる」と南信州観光公社地域振興室長の竹前雅夫氏。

「次回の大会では、感動体験のもたらす意義と立ち位置を確認する機会にしたい」と話す。

総会では、次回の全国ほんもの体験ネットワーク総会の開催概要も報告された。場所は高知県四万十市で9月7日の開催を予定。総会と併せてコーディネーター研修会、体験ツアーなども行う。受け入れは幡多広域観光協議会。

全国ほんもの体験ネットワークの総会